

平成 26 年 5 月 13 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520266

研究課題名(和文) ジェイムズ・ジョイスと東洋文化の系譜学

研究課題名(英文) James Joyce and the Genealogy of Oriental Studies

研究代表者

伊東 栄志郎 (Ito, Eishiro)

岩手県立大学・高等教育推進センター・准教授

研究者番号：70249241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究「ジェイムズ・ジョイスと東洋文化の系譜学」は、従来20世紀ヨーロッパ文学最高峰として論じられてきたジョイス作品の東洋文化的要素を検証したものである。ジョイスの活躍した20世紀前半はアジアにおいては大日本帝国の時代でもあった。研究者は日本の帝国主義を一方向的に断罪する研究が増える可能性を危惧しており、東アジア諸国の研究者たちも納得できる形で、日本や東アジア文化とジョイスとの関係を学術的かつ体系的にまとめる役割を担いたいと願い、積極的に韓国や中国の関連学会に研究発表をした。交付を受けた5年間において、国際学会発表9件、学術雑誌掲載論文8件(内3件を韓国、1件中国で出版)という成果を上げた。

研究成果の概要(英文)："James Joyce and the Genealogy of Oriental Studies" is a research for verifying the Eastern cultural elements of James Joyce's works which have been conventionally considered as one of the greatest European literature. The early twentieth-century when Joyce lived is the age of Japanese Imperialism in Asia. The researcher has entertained apprehensions of the possible remarkable increase of studies accusing of Japanese Imperialism unilaterally by other Asian scholars. He wishes to have a role of generalizing Asian Joyce studies academically and systematically so that both Japanese and other Asian scholars can admit them. So he has been very positive to participate in Korean and Chinese conferences. During the five-year Scientific Research of Grant-in-Aid, the researcher gave nine presentations at international conferences outside Japan and published eight academic articles (3 of which were published in Korea and 1 in China).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学 ジェイムズ・ジョイス 東洋文化 ジャポニズム イスラム (反)ユダヤ主義

1. 研究開始当初の背景

研究者は、ジョイス作品に描かれたヨーロッパ文化に魅了されて20年以上研究してきた。しかし、あるときから非英語圏である日本で英語・英文学を教育研究することの意義について考え出した。幸い、科研費をいただき、「ジェイムズ・ジョイスとオリエンタリズム」という題において、ジェイムズ・ジョイスの研究をポスト・コロニアリズムの視点から2006年から2008年まで3年間行ってきた。これは、エドワード・サイードの研究を参考にしてオリエンタリズムまたは広大なアジア地域がいかにジョイスの著作に描かれているかを先行研究したものである。ジョイスを論じる場合、20世紀前半の東アジアの視点は非常に新しいものである。国際学会でジョイスと日本の関係を論じたところ、反響が大きく、韓国や中国をはじめ英米の学者たちも申請者の論文等を参照して研究がはじまった。その中にシュルダン・プリヴィックというアメリカ人学者がおり、拙研究を参照した『フィネガンズ・ウェイク』の南京大虐殺隠喩の研究論を含んだ著書『ラカンとジジエクを通してみるジョイス』(パルグレイヴ・マクミラン2008)を出版した。幸い、本人から出版前に原稿チェックを依頼され、事実誤認などを指摘して修正案を示唆し、過度の日本帝国主義批判は刊行物からなくなった。

2. 研究の目的

ヨーロッパ文化の異端者ジョイスの東洋との関わりを、ことに日本との関係を考察していくのが本研究の目標である。ジョイス研究は、大正末期から昭和初期にかけて本格的に開始され、第二次大戦の時期を挟みながら、戦後から現在にいたるまで盛んに行われているが、ほとんどが西洋的視点でのみジョイスを捉えるものであった。これでは、世界中どこでジョイスを研究しても変わらないことになってしまう。日本において、ジョイスをそして英文学を研究するのに、日本人の視点で研究を進めることでは、いまだ誰も十分な成果を残せていないのである。

ジョイスにおいては、「東方への旅」のモチーフが初期作品「アラビヤ」から見受けられ、『若き芸術家の肖像』、『ユリシーズ』第5挿話のユダヤ人ブルームの「東方への旅」のパロディそして『フィネガンズ・ウェイク』の最終章(第四部)において、日本仏教僧化した聖パトリックが中国仙人と化した大ドルイド僧と宗教や歴史に関し議論するところまで、作者の生涯を通して巨大なテーマであるというのが研究者の持論である。

3. 研究の方法

本研究は、基本的に研究・調査 学会発表 再調査 報告書という手順となる。年数回程度東京の関東ジェイムズ・ジョイス研究会及

び京都の関西『ユリシーズ』読書会に参加し、発表当番をこなすかわら、情報交換などをおこなった。

原則として、欧州各地で資料収集を行いながら、年1件以上の国際学会発表をおこない、欧米及び東アジアの研究者と積極的に交流し、さらに学会終了後の現地研修・資料収集を踏まえて、学会発表論文を加筆修正する形で、年1件以上の論文を発表していった。

4. 研究成果

科研費交付金をいただいた5年間の研究内容、研究成果を時系列的にまとめると、以下のとおりである。

(1年目) 2009年度前半には、主として東方ユダヤ人の研究を行った。スコットランドにおける国際学会での研究発表：7月末にスコットランドのグラスゴー大学で開催された第33回国際アイルランド文学協会年次大会で、「イスラエルの及びイスラムの要素でダブリンを描く ジェイムズ・ジョイスの多国籍モダニティ」という題目で、学会発表を行い、一定の評価を得た。ジョイス作品に出てくる(聖書やユダヤ、アラビアの要素を含む)オリエンタリズムのモチーフの意義を再考したものである。それが、T.S.エリオットが論考「『ユリシーズ』、秩序、神話」の中で擁護した「神話的手法」とどのように結びつくのかが重要であると考えた。欧米のクリスチャンは聖書の記述によってはじめてオリエンタリズムを意識する。ジョイス作品においては、ユダヤ人もヨーロッパ人ではない「異質な人々」と意識されており、『ジャコモ・ジョイス』、『ユリシーズ』とユダヤ人がその生活習慣とともに詳細に描かれている。一方、預言者ムハンマドは『ユリシーズ』で3回言及され、『アラビアン・ナイト』のモチーフとともにカトリック色の強いダブリンも国際色豊かな側面があることを示唆している。ジョイスはどうやらトリエステ時代から、パルトンの英訳、マルドリユスのコーラン伝説などで少しずつ学んでいたようである。特にユダヤとイスラムの要素を作品に取り入れることで、元来の地理的接近性を強調するとともに、両者の文化的橋渡しをしているのではないかと現在のパレスチナ紛争を念頭に論じた。

(2年目) 2010年6月に、チェコ共和国プラハのカレル大学で開催された第22回国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムで、『フィネガンズ・ウェイク』における能と禅」という題目で、学会発表を行った。『フィネガンズ・ウェイク』における日本の伝統文化、特に能と禅への傾倒と言及箇所について論じた。リチャード・エルマンやマイケル・ギレスピーが記録しているように、ジョイスはフェノロサの『能 日本の古典舞台の研究』(1917)を所有していた。ニューヨーク在住の出版業

者ジョン・クインから贈られたものである。同じ頃、エズラ・パウンドやW. B. イェイツという日本文化、特に能や禅に造詣が深い文学者とジョイスは交流していたので、日本文化に接する機会も多かったはずである。ところが、現存する資料にはジョイスと能や禅との関わりを示唆する証拠が乏しく、故に今まであまり論じられてこなかった。『フィネガンズ・ウェイク』にはNoh(能)という言葉が2度言及されている。また、作品中に言及される多くの謎は禅の公案に性質が類似している。そもそもジョイスが『ダブリン市民』の執筆意図を示すときに用いた「エピファニー」という用語も「見性」とほぼ同じ意味である。Bonze (坊主)という単語は作品中でよく用いられた日本語であり、アイルランドの守護聖人聖パトリックは日本の禅僧「パトリキさん先」(FW317.02)になり、小説最後の第四部において中国の哲学者と化した大ドルイド僧と宗教論争するのである。

11月にソウルの世宗大学で開催された韓国ジョイス協会主催第4回東アジア・ジョイス学会において、「極東への旅 聖フランシスコ・ザビエルを中心にイエズス会の視点でジョイスを読む」という題目で口頭発表した。この論文は、日本にキリスト教を伝道したことと有名なイエズス会がいかにジョイスとその作品群に影響を与えたかを論じたものである。特に極東でのイエズス会の布教に焦点を当てた。フランシスコ・ザビエルは1549年8月15日に薩摩に上陸し、1551年11月まで言語や文化の違いに苦しみながらも布教活動を行なった。彼は1552年12月3日に中国の上川島で熱病のため亡くなるが、その後も彼の盟友たちにより日本では1644年まで布教活動がなされた。その後キリスト教が禁止されると、イエズス会は中国での布教活動を活発化し、1579年から1724年まで布教活動を行なった。イエズス会士たちは西洋科学や天文学、芸術を東アジアに伝えたが、一方で彼らは特に中国を中心としたアジアの思想をヨーロッパに伝えた。ジョイスは2つのイエズス会の設立した中等学校に通った。すなわちクロンゴーズ・ウッド・カレッジとベルヴェディア・カレッジである。すなわちジョイスは人格形成期において多分にイエズス会思想の影響を受けているのである。イエズス会こそがジョイスと東アジアを最初に結びつけたのである。ザビエルの生涯は『若き芸術家の肖像』第3章で詳細に描かれている。『ユリシーズ』においても主人公のブルーム夫妻が住むアパートはベルヴェディア・カレッジと聖フランシスコ・ザビエル教会から徒歩5分以内にある。

(3年目)2011年7月にベルギーのルーヴェン・カトリック大学で開催された第35回国際アイルランド文学協会年次大会で、「「快い哲学」ジョイス作品における宗教的アイデンティティの和解」という題目で、学会発表を

行った。これは、伊東他3名(クロアチア人2名、イタリア人1名)が参加するパネルに参加する形で他の3つの発表と合わせて議論した。本稿は、いかに宗教的対立と和解がジョイス作品で描かれているかを論じたものである。ジョイスの東方への文学的旅が、キリスト教と和解する前にいかに不可欠なものであったかを議論している。仏教は、キリスト教の対比し得るものとして重要な役割を担っている。ジョイスは、ダブリンで神智学を通じて、仏教に親しんだようである。1903年に彼は、H. フィールド＝ホルの『ある民族の魂』の書評を書いているが、その中でビルマのオリエンタルな雰囲気や耽溺しながら、戦争を避けて「円滑に事を収める哲学」(a suave philosophy)として仏教を賞賛している。エルネスト・ルナンの『イエスの生涯』を読みながら、ステイヴン・デーダラスは、『ステイヴン・ヒーロー』においてキリストとゴータマ・ブッダを比較している。愛や結婚、そして家族を持つということが、当時のジョイスにとって宗教を論じるときにも重要な問題であったようだ。本論では、いかに仏教や他のアジアの宗教がジョイス作品に言及されているかを論じた。

(4年目)2012年6月にアイルランドのダブリン大学トリニティ・カレッジとユニバーシティ・カレッジ・ダブリン共催の第23回国際ジェームズ・ジョイス・シンポジウムで、「アイルランド性のアジア性を意識すること ジョイス周辺のアイルランド人オリエンタリストたち」という題目で学会発表を行った。本論は、アイルランドのオリエンタリズムがいかにジョイスや同時代人たちに影響を与えたかを論じたものである。M. マンスールは、『アイルリッシュ・オリエンタリズムの物語』において、アイルランド人オリエンタリストたちは、大英帝国の経営維持に多大な貢献をしたと述べている。アイルランドの思想家たちが何世紀にもわたって信じていたように、ジョイスも、「聖人と賢者の島アイルランド」という論考において、「英語とは異なり、アイルランド語の起源はオリエントにあり、多くの文献学者たちからフェニキア人の古代語と同一視されてきた」と論じている。また、彼は、多くのアイルランド人はいくつかの重要なオリエントの古典を英訳し、紹介することで大英帝国の芸術や思想に大きな貢献をしてきたことを喜々として記している。『アラビアン・ナイト』を初めて英訳したサー・リチャード・バートンや『ルバイヤート』を訳したエドワード・フィッツジェラルドはアイルランド系である。若きジョイスは、十九世紀末期、ジェームズ・クラレンス・マンガン、ジョージ・ラッセル、W. B. イェイツといったアイルランド人オリエンタリストたちに影響を受けたことも知られている。その時代のオリエンタリストたちはしばしばナショナリストでもあり、大英帝国の文化の影響からア

イルランドを切り離す必要があった。即ち、アイルランドのオリエンタリズムはナショナリズムと強い関係があるのだ。例外は、小泉八雲の名前で知られるギリシャ系アイルランド人ラフカディオ・ハーンで、日本人の妻を迎えて帰化し、日本について多くの著作を残したが、アイルランドのナショナリズムや独立運動にはあまり関心を示していなかった。本論では、ジョイスを、マンガン、ラッセル、イエイツ、ハーンといったアイルランドのオリエンタリストたちと比較している。最近の経済用語「ケルトの虎」は、アイルランドのアジア性を示すものである。

11月に韓国全南大学で開催された韓国ジョイス協会主催第5回東アジア・ジョイス学会で、「三人の日本人ハイブリッド・ジョイシアンたち：芥川龍之介、伊藤整、村上春樹」という題目で学会発表した。20世紀初めから日本では、多くの小説家、特に自然主義作家たちが独創性を出そうとして、自分たちの私生活を題材にして小説を書き始めた。日本においては、1918年野口米次郎による初めてのジョイス紹介論以来、初の韓国モダニスト作家パク・テオンを含めて、多くの野心ある作家たちがジョイスの革新的な語りのテクニクやモダニズムの手法を吸収する一方で、作者の自伝的要素をどのような創作に用いるかを学んだのであった。芥川龍之介は、ジョイスの『若き芸術家の肖像』第1章の語り手法にどれほど衝撃を受けたかを記したメモを残した。伊藤整は、初めて『ユリシーズ』を邦訳し、後に『若い詩人の肖像』というジョイスを強く意識した自伝的小説を描いた。現在も意欲的な創作活動を展開している村上春樹は、上記二人とは異なり、ジョイス作品を含む邦訳された外国文学を読んで、自分の文体を築いてきた。日本の作家たちは、ジョイスやブルーストから「内的独白」や「意識の流れ」といった手法を学んだが、自分の作品に取り入れて成功した者はいないように思われる。ロマン派の作品を好んだ芥川と伊藤はアイルランド文学に親しんでおり、双方とも最初はイエイツの詩作品を好んだ。村上の文学背景は、二人より複雑だが、彼もまたブルーストを好み、自身の小説で何度も登場人物たちに言及させている。これら3人のジョイス的作家たちにとって、ジョイスは創作意欲を奮い立たせる作家である。3人とも西洋文学的要素を日本文学や文化背景に取り入れて、自分たち独自のハイブリッド文学を創造しようとしたことを論じた。

12月に韓国釜山 BEXCO で開催された韓国英文学会(ELLAK)主催国際年次研究大会2012において、「ジョイスとイエイツにおける能と禅 東アジアにおける日本文化の位置付け」という題目で学会発表した。日本文化は、中国大陸、朝鮮半島の影響のもとに発展してきたが、次第に独自性を示し始めるようになった。その代表が能であり、禅文化である。言い換えれば、国境を越えて、中国

人、朝鮮半島人は能や禅に自分たちの古来の文化的要素を見いだせるのである。即ち能や禅は、中国、朝鮮半島文化の日本語版と見なそう。この前提に立ちながら、発表はジョイスとイエイツ作品における能や禅を言及している可能性について考察したものである。

(5年目) 2012年7月に北アイルランドのクイーンズ大学ベルファストで開催された第37回国際アイルランド文学協会年次大会で、「ジョイスと都市 「ウェストランド通りで彼はベルファスト・アンド・オリエンタル紅茶店の陳列窓の前で立ち止まった」(U 5.17-18)」という題で学会発表を行った。本論は、いかにジェイムズ・ジョイスが生まれ故郷ダブリンの都市性を表現したかを論じたものである。ジョイスは生涯を通じてほぼダブリンだけを書いたことで知られる。ダブリン市は彼の小説のメイン・テーマである。「下宿屋」の語り手は、「ダブリンは小さな町だ。みんなが他のみんなのことを知っている」(D 66)と語り、『若い芸術家の肖像』の語り手は、ダブリンを「キリスト世界第7の都市」(P171)の誇らしげに述べる。後に、ジョイスは「親愛なる汚れたダブリン」(U7.921)とか「親愛なる汚れた団子(Dumpling)」(FW215.13-14)と呼びかけている。これらの引用はジョイスの都市の捉え方の変遷を示唆している。海外に暮して、彼はダブリンは小さくはないと次第に考えるようになった。むしろ、欧州の大多数の都市より大きいのである。リチャード・セネットは、都市を「見知らぬ者たちが出会う人間の居留地」(『公衆の没落』39頁)と定義した。ダブリンを人々が見知らぬ者たちと出会うことがある大都市として描くために、ジョイスは『ユリシーズ』において、ユダヤ人の主人公レオポルド・ブルームを採用し、後期作品には多くの非ヨーロッパ的/オリエンタル・モチーフを挿入した。ガレット・ディージーは息を切らしながら、「アイルランドはユダヤ人を迫害しなかった唯一の国だという名誉があるそうだと述べる、「なぜなら奴らを決して受け入れなかったからだ」。しかし、レオン・ヒューナーは、アイルランドの推定ユダヤ人口は1901年で3,771人であり、それはロシアと東ヨーロッパにおける過酷な迫害の結果だと報告した(『アイルランドのユダヤ人』242頁)。その数値は、アイルランド、特にダブリンやベルファストといった大都市が多くの「見知らぬ人々」(ユダヤ人)を歓迎してきたことを示している。『ユリシーズ』の「食蓮人」挿話の最初でブルームは心の中で東方へ旅する。本論では、ダブリンやベルファストといったアイルランドの都市をお茶などのオリエンタル・モチーフとともにジョイスがいかに描いてきたかを論じた。

8月に中国上海復旦大学で開催された2013年上海ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムで「ジョイスの「ひび割れた鏡」を通してみ

た中国と日本」という題目で学会発表した。本論は、ジェームズ・ジョイスがいかにか東アジア、特に中国と日本を描いたかを論じたものである。ジョイスの「ひび割れた鏡」は両国を緊密なペアのように映し出している。『フィネガンズ・ウェイク』を通して、中国と日本のペアはしばしば見受けられる。日露戦争後、ジョイスは弟スタニスラウスに「日本は世界一流の海軍」(1906年11月6日付; 『書簡集第2巻188頁』)と書いた。『ユリシーズ』で、レオポルド・ブルームは「ロシア人なんて日本人にとってはただの8時の朝食だよ」と聞いたのを思い出す(U 4.116-17)。しかし、ジョイスは多くのアジア人が次第に日本帝国主義を嫌うようになったと気づいていたようである。

ジョイスが中国と日本のことを意識し始めたのはイエズス会学校時代だったろう。『若き芸術家の肖像』の聖フランシスコ・ザビエルを讃えた黙想場面で、校長は日本まで及んだ聖人の布教活動について語る。『ユリシーズ』の朝の場面でレオポルド・ブルームは、「太陽の跡を追って」歩く(U 4.99-100)。ブルームは、特に「カリプソー」挿話や「食蓮人」挿話で中国や日本を含むオリエントに興味を示す。後に「イタケー」挿話で、それはブルーム蔵書のF. D. トンプソンの『太陽の跡を追って』のタイトルであることに気づく。それは、著者が7ヶ月かけて日本や中国を経由した世界旅行の記録である。『フィネガンズ・ウェイク』は中国語や日本語の複合語を含む多くの非ヨーロッパ的要素を含んでいる。北京、紫禁城、上海や黄河など中国の地名も言及され、孔子、老子から孫文の「天下為公」まで隠喩されている。ハイライトは第四部の中国人大ドルイド僧と日本人僧化した聖パトリックの会話である(FW 611-613)。ジョイスは中国と日本の関係をケルトとキリスト教、またはジョージ・バークリーと聖パトリックのそれに対比させている。この場面は能舞台の様相を呈しながら1938年頃の日中関係の緊張を反映して、蒋介石が日本軍侵攻を阻止するため1938年6月11日夜黄河の堤防を破壊・死者数推定100万人とも言われる黄河決壊事件まで暗示していることなどを論じた。ジョイスは1939年に小説を完成させ、日中戦争の結末を見ずに1941年1月に死亡した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

1. Ito, Eishiro. "Awareness of Asianess of Irishness: Joyce among Irish Orientalists" 『総合政策』第15巻第2号(岩手県立大学総合政策学会)、2014年、pp.147-159. (査読有)

2. Ito, Eishiro. *Asia was, Laozi is, Plurabelle to be: China and Japan through Joyce's "Cracked Looking-glass"* (《比較文学与世界文学》第四期 北京大学出版社)、2013年、pp.16-34. (査読有)
3. Ito, Eishiro. "A Suave Philosophy": Reconciling Religious Identities in Joyce's Works" 『総合政策』第15巻第1号(岩手県立大学総合政策学会)、2013年、pp.37-47. (査読有)
4. Ito, Eishiro. "Bonzour 'Mousoumeselles': Joyce and Japonisme" 『英語・英文学論叢 片平』第47号(片平会/金星堂)、2012年、pp. 33-50. (査読有)
5. Ito, Eishiro. "Depicting Dublin with Israelite and Islamic Elements: James Joyce's Transnational Modernity" 『総合政策』第13巻第2号(岩手県立大学総合政策学会)、2012年、pp.89-102. (査読有)
6. Ito, Eishiro. "Noh (能) and Zen (禅) in Joyce and Yeats: Mapping 'Convergence' in Japanese Culture in East Asia." 2012 ELLAK International Conference Proceedings: "Border, Translation, and What Then?: Rethinking 'Convergence' in English Language and Literature." The English Language and Literature Association of Korea、2012年、pp.117-130. (査読有)
7. Ito, Eishiro. "Three Hybrid Japanese Joyceans: Ryunosuke Akutagawa, Sei Ito and Haruki Murakami" *James Joyce Journal*, vol.18, no.2 (The James Joyce Society of Korea)、2012年、pp.207-235. (査読有)
8. Ito, Eishiro. "Journey to the Far East: Reading Joyce in the Jesuit Context Featuring St. Francis Xavier" *James Joyce Journal*, vol.16, no.2 (The James Joyce Society of Korea)、2010年、pp. 53-78. (査読有)

[学会発表](計 9 件)

1. Ito, Eishiro. "China and Japan through Joyce's 'Cracked Looking-glass.'" (1st Plenary Speech) 2013 Shanghai James Joyce Symposium. 2013年8月14日. 中国上海市復旦大学.
2. Ito, Eishiro. "Joyce and the City: 'In Westland row he halted before the window of the Belfast and Oriental Tea Company' (U 5.17-18)." IASIL 2013: "Urban Cultures" (The International Association for the Study of Irish Literatures). 2013年7月24日. Queen's University, Belfast, Northern Ireland, UK.
3. Ito, Eishiro. "Noh (能) and Zen (禅) in

- Joyce and Yeats: Mapping 'Convergence' in Japanese Culture in East Asia." The 2012 ELLAK International Conference: "Border, Translation, and What Then?: Rethinking 'Convergence' in English Language and Literature." 2012年12月12日. 韓国釜山市, BEXCO.
4. Ito, Eishiro. "Three Hybrid Japanese Joyceans: Ryunosuke Akutagawa, Sei Ito and Haruki Murakami." The 5th International Conference on James Joyce: "Hybrid Joyce." 2012年10月10日. 韓国光州広域市全南大学校.
 5. Ito, Eishiro. "Awareness of Asianess of Irishness: Joyce among Irish Orientalists." XXIII International James Joyce Symposium: "Joyce, Dublin and Environs." 2012年6月13日. Trinity College Dublin, Ireland.
 6. Ito, Eishiro. "A Suave Philosophy": Reconciling Religious Identities in Joyce's Works." IASIL 2011: "Conflict and Resolution" (The International Association for the Study of Irish Literatures). 2011年7月19日. Katholieke Universiteit Leuven, Belgium.
 7. Ito, Eishiro. "Journey to the Far East: Reading Joyce in the Jesuit Context Featuring St. Francis Xavier." The 4th International Conference on James Joyce: "Place in Joyce." 2010年11月10日. 韓国ソウル市世宗大学校.
 8. Ito, Eishiro. "Noh and Zen in *Finnegans Wake*: 'Prifarfeast' 'in the east' (FW 541)." XXII International James Joyce Symposium: "Prifarfeast." 2010年6月16日. Charles University, Prague, Czech.
 9. Ito, Eishiro. "Depicting Dublin with Israelite and Islamic Elements: James Joyce's Transnational Modernity." 2009年7月30日. IASIL 2009: "Irish Literatures: World Perspectives" (The International Association for the Study of Irish Literatures). 2009年7月30日. University of Glasgow, Scotland, UK.

〔図書〕(計 1 件)

Ito, Eishiro. "Chapter 12. 'United States of Asia': James Joyce and Japan." *A Companion to James Joyce* (London, New York, etc.: Blackwell Publishing)、pp.193-206、2011年 (paperback). (査読有)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊東 栄志郎 (ITO, Eishiro)
岩手県立大学・共通教育センター・
准教授
研究者番号: 70249241

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

BRIVIC, Sheldon
米国 Temple University 教授

BROWN, Richard
英国 University of Leeds 准教授

戴从容 (DAI, Congrong)
中国復旦大学副教授

金吉中教授 (KIM, Kiljoong)
韓国ソウル大学校教授

會麗玲教授 (TSENG, Liling)
台湾國立台湾大學教授